
あの日夢見た幻想曲 ～フォース・ウォール～

アロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日夢見た幻想曲 ～フォース・ウォール～

【Nコード】

N7272I

【作者名】

アロ

【あらすじ】

主人公ユウは四つの宝玉を集める旅の途中、記憶喪失の少女にである。まるでRPGのような展開だが……？

はじめに。

こんにちは。または始めまして。

姫反アロと申します。

今作、タイトルは『あの日夢見た幻想曲』^{ファンタジア}。

序盤？は？異世界ファンタジーです。

RPGでもやるノリで読んでいただければなと思います。

もし、感想等いただけましたら幸いに思います。

WEBページ『Rain Coat』

<http://book.geocities.jp/kimib>

okucatt/rain.html

mixi

http://mixi.jp/show_profile.pl?id=24261036

身の丈ほどもある大剣の切っ先がユウの肩を掠めた。どれだけ持っていたか、それを確認する余裕は無い。

目の前の敵は俗にワーウルフと言われる獣人族。街に居るワーウルフは賢く力もある種族だが、目の前の敵に理性と呼べるものは無い。言わば動く死体だった。

ワーウルフが大剣を振りかぶってくる。

それをワンステップで避け、すかさず突系三連撃特技ファースト・ピアシスを放つと自身の運動神経では到底不可能な、鋭さ速さ正確さで三回の突きが繰り出された。

いくら今日が満月といえど、隙の多い大剣使いに突系の攻撃を与えるのは容易い。三度の突きは全て命中し、狼男が僅かに怯んだ。

ユウは続けざまに突系六連撃秘技セカンド・ピアシスを発動する。怯み状態にある敵に避けることは叶わず、突きは着実に敵のライフを削っていく。

僅かな硬直後、すぐさま後ろに飛び去る。見れば敵は早くも大剣を構えていた。

ふと見れば、敵のライフは二割弱。
ならば。

ワーウルフが大剣を構えて突進してくる。大剣特有の斬系単撃奥儀ヴォーパル・デイバイド。ただ一度の振り下ろしだが、以前それを片手剣で受け見事に折られたことがある。

避けるには速く、受けるには重い一撃。

ユウは後の先で、突系単撃特技ラッシュ・エッジを放った。突きは敵ではなく空を突く。が。それは狙い通り。ラッシュ・エッジは最初に突進モーションがある。その突進で敵の攻撃を交わすの

が目的だった。

敵の大剣も空を切ったのを確認し、ユウはすぐさま斬系四連撃秘技セカンド・ヴァーティカルをワーウルフの腹に刻む。振り上げ振り下しがワーウルフを怯ませる。

続けて突系九連撃奥儀サード・ピアシス。

最高位の連続攻撃にワーウルフは為すすべ無く、最後の強突きと同時に体を光に換えて四散させた。

「ふう」

ユウは大きく息を吐いて、剣を鞘に収める。

ワーウルフが立っていたところを見ると、ぼろぼろになった剣と鎧が落ちていたが、これは拾っても売れない。そもそも目的はこちらではなかった。

瓦礫の道を進むと、そこには古びた祭壇がある。十段余りの階段を上り、そこに浮かぶ玉に手を伸ばした。

それは卓球の球と同じくらいの大きさで、白色の輝きを放つ不透明な玉。

扉を開くための四つの宝玉の一つ 白虎の宝玉。

触れた瞬間、玉は光を増したが、それも刹那の間。二秒後には光を失い、ただの白色の玉になり、ユウの手のひらで沈黙した。

ルツツ城下町の宿に帰って、食堂に行くと、若女将が暖かい笑顔と共に熱々のスープとパンを出してくれる。

「お風呂。さつさと入って寝なよ」

彼女は十七年間の人生の中で三本の指に入る女将だ。

年は二十代後半くらいで、これが中々の美人。その上、面倒見が良いし、料理もおいしいし、何より常に笑顔だ。

女将を慕った常連客も多いと聞く。
けれど。

その笑顔もどこか作り物めいている。

まるで役を演じているよう　全ての行動が芝居染みて見えるのだ。

女将だけではない。

鍛冶屋の頭、町の自衛騎士、道行く旅人　育ててくれた両親までも。

まるでこの世界が演劇の中かののように。

こんなことを思うのは自分でもどうかしていると思う。

まして、育ててくれた両親の愛情が演技だと思えるなんて本当に
恩知らずも良いところだ。大体、十数年間育ててくれたのに、それが芝居だったなんて有り得ない。

ただ心の奥底で、芝居なのではと思ってしまっ自分がいるのだ。

「ふう」

ユウはスープの残りを一気に飲み干した。

そして思う。

少なくとも。このスープの温かさは本物だと思う。

その夜。

ユウはいつもの夜練習に出かけた。

術技は使用回数が多いほど熟練度が増していく。つまり、使って使いまくったほうが良いのだが。

術儀の発動にはSP スキルポイントを使う。

SPは時間と共に自然に回復する。

そして、それには当然上限がある。つまり、上限に達しているときは、回復がストップする。

つまり、グラスに注がれるワインが溢れてしまっている状態だ。

漏れるくらいなら、有効活用したほうが良い。

つまりSPが溜まって来たら術技の練習をしてSPを消費した状態にするのだ。

当然、寝ている時はSPの回復量も多い。だから寝る前にたっぷり術技の練習をし、SPを消費してから寝る。そうすれば効率よく術技の熟練度をあげることが出来る。

勿論、宿の小部屋でやるわけにはいかないので、いつも街の広場や宿の前を練習場に行っている。

外に出てみると、昼間の活気は嘘のように静まり返っていた。

今日は斬系四連撃秘技セカンド・ヴァーティカルの練習をメイン

に そう思っただけを歩いていると、前方に人影を見つけた。

それは飲み屋の前 二人の影。

一人は男だ。

身長は百八十くらいでがっしりとした体格でそして帯刀している。金の装飾は綺麗だが、装飾過美に思える。服装もこれまた高そうなものを着ている。どうやら、庶民ではないらしい。

もう一人は 少女だ。

この辺りでは珍しい黒色のセミロングに黒い瞳。赤と白を基調としたワンピース。

「いいじゃん。一回だけで良いからさ。金貨一枚だよ?」

男は少女の腕を右手で掴んで、左手で金貨をちらつかせている。

少女は性質の悪い貴族に絡まれたってところか。

「ちよつと離して下さい!」

少女は強引に男の腕を振り解き、そのまま男の股間を蹴り飛ばした。

いくら鍛えた人間でも、そこまでは鍛えられない。男は悲鳴を上げてうずくまった。

「て、てめえ……」

中々見ていて愉快的な光景だ。

だが、悠長に見物しても居られなくなった。逆上した男が、腰の剣に手を伸ばしたのだ。

満足そうな子をしていた少女も、さすがに剣を見て怯む。

「人が優しくしてれば調子に乗りやがって……」

なんか、さつきから男のセリフが余りにもステレオ過ぎて、一種笑いを呼んでしまう。ドラマでは、間違いなくヤラレ役だ。

男が少女に近づくと。

「おい!」

ユウはそう叫ぶと、男は振り返り、いかにも見下し目線で睨んでくる。

「何だ、ガキ」

「その辺で止めとけよ。騎士団呼んでも良いのか?」

男は卑しい笑みを浮かべた。

「そうか。なら呼べば良い。ただし 呼べるものならな!」

途端男は剣を抜き突進してきた。帯刀しているだけあってか、どうやら剣の心得はあるらしい。

剣が術技発動特有の薄い光を放ち、男が突進してくる。突系単撃

特技ラッシュ・エッジだ。突進モーションで一気に間合いを詰めるため、回避しにくい技だ。普通なら。

だが、ユウはそれをワンステップで避けた。

男には剣の心得がある。逆に言えばそれは嗜むレベル。まず攻撃するのがバレバレ。それに突進のスピードの遅い。技の持ち腐れとはこのことだ。

ユウはすぐさま、同じラッシュ・エッジを男に放つ。同じ技でもその熟練度によって技の性能は左右される。ユウのそれは、速さ・威力、どちらも男のその二倍はあった。

さらに続けざまにユウは突系六連撃秘技セカンド・ピアシスを放つ。疾風の如き五連突の後、最後の強突きが男を数メートル先の地面に叩きつける。

ユウの計七突で、男のライフは半分以下になっていた。

身なりからして、男は温室でぬくぬくと育ってきたのだろう。当然、誰かから攻撃を受けるなどということは無かったはず。つまり、これが始めて知る痛みなのだろう。

その痛みの前に、男は恐怖に怯え口を小刻みに動かしている。

当然戦意など残ってはおるまい。そう思い、ユウは少女のほうに歩み寄った。

「大丈夫？」

少女は驚いた顔で、ただじっと見つめてくる。敵だか味方だか判断をしかねているようだった。

「大丈夫。俺は別に変なことしないから」

そう微笑みかけると、彼女もようやく僅かに笑みを浮かべた。

「ありがとう。本当に助かった」

「どういたしまして」

そう言いながら、ユウは剣を鞘に収める。

「ええっと、俺はユウ。君は？」

そう聞くと、少女は予想外な反応を示した。

少女は黙り込んでしまったのだ。

名乗りたくない……のだろうか。

だが数秒後、それは違うことが分かる。

「それが 自分が誰だか分からないの」

なんだか在那里来たりロープレのような展開だった。

助けた少女は記憶喪失。自分の名前は勿論、なんと『ウィンドウ』の開き方も知らなかった。

「ええっと、四角をイメージしながら、こう指先でL字型を書くんだ」

まずユウが見本でウィンドウを開く。

現れたのは縦三十横二十センチほどの半透明なウィンドウ。ここには名前やライフ・スキルポイントなどの数値が載っている。

それを見て、少女も同じように指を動かす。

すると、やはり同じく半透明なウィンドウが現れた。その一番上には『Name - Nanaka』の文字。

「ナナカ。多分君の名前だけど、心当たりは？」

そう聞くと、少女は首を横に振った。

「そうか……。まあここに書いてある以上、おそらくこれが君の名前だから、とりあえずナナカと呼ぶことにするけど、良いかな？」
今度は頷く。

「ええっと、じゃあナナカ。少しナナカのウィンドウを見るけど良いかな？」

ユウはウィンドウを見る前に一応確認を取る。別にウィンドウには体重だのサイズだのが書いてあるわけではないが、それでも一応いくらかの個人情報載っている。だから他人のを勝手に見るのは重大なマナー違反だ。

ナナカはもう一度頷いた。

それを確認し、ユウは『習得術技一覧』をページを開く。

「な……」

思わず声を漏らす。

これは驚いた。

ナナカはかなり高レベルの技と術を習得していたのだ。

剣技で言うと、重量斬系の技が多い。なんとファーストからサードヴァーティカルまでを習得している。

さらに技ばかりでなく術もいくつかある。下級術技ファイア・ポールは勿論、フレイム・ミルなどの上級術技も習得しているようだ。「……めっちゃくちゃ強いじゃん」

立ち話もなんなので、とりあえずナナカを宿の食堂まで連れてきた。

「ええつと、じゃあ改めて自己紹介を」

ナナカは、女将さんが用意してくれた軽食を口に運びながら耳を傾けてくる。

「名前はユウ。姓はキリール。ランドルの東端生まれで、年は今年で十六歳。まあワケあって旅していたり。一応剣技の心得があるけど、術は初歩の初歩<ファイアボール>も使えないレベル」

ランドル国はオルディシエラ大陸の東部に位置する『五大国』の一つだ。五大国の中で唯一の民主主義国で、生活水準も高い豊かな国だ。

ちなみに現在地であるルッツがランドルの首都。

「旅？」

「まあね。四つの宝玉を集める旅さ」

四つの宝玉。

即ち、青龍、白虎、玄武、そして朱雀。これらの宝玉を集めること。それはキリール家に課せられた使命だった。正確には『赤い満月の日に生まれた者』に課せられた使命だ。

「まあ、そんなわけで？神殿？を巡って宝玉を集めてる。ちょうど今日二つ目を手に入れたところさ」

ユウは良い終えたと同時にウィンドウを開いた。それからアイテム欄を開く。

中には貴重な魔法石がいくつか、それに非常食、代えの片手剣、神殿で拾ったモノなどが雑多に並んでいる。今日は神殿に行ったばかりで、整理整頓が出来ていない。だがその割には、目的のアイテムをすぐ見つけることが出来た。

選択したアイテムが、一瞬にして手のひらの上に出現する

「これが宝玉さ」

半透明で卓球のボールくらいの大きさの玉は、緑色と白色の微弱な光を交互に放っている。

それをナナカは食い入るように見つめる。

「二色に光ってるだろ？ これは新しい宝玉を手に入れるたびに、融合して、放つ色を増やしていくんだ」

「綺麗……ね」

「そうだな。とりあえずこれで二つ。残り二つだ」

ユウは言いながらウィンドウの操作して、宝玉をしまった。

「さて。まあこつちが話せることはこのくらいかな……。で、君、なにか思い出したこととかは？」

そう聞くと、ナナカはコップを置いて首を振った。

「そっか……」

少し考えるが、特に良い考えが浮かばず

「まあ、とりあえずココに泊まって行ったら？」

翌朝、二人は早朝の広場に居た。

人通りはまだ少なく、朝の支度で忙しい商人が若干行きかう程度。こんな朝早く起きたのは、広場に人がいないうちにやってしまいたいことがあったからだ。

「じゃあとりあえずウィンドウを開いて。右端のメニューに？術技一覧？があるだろ？」

言われたとおり、ナナカはウィンドウを開いて術技一覧をクリックする。

「術技を発動する方法は二つだ」

朝早くに起きた理由。それはナナカに術技の使い方教えること。

「一つ。メニューの技一覧を開いて、使いたい技をクリックする」
言いながらユウは自分の術技一覧の上から五番目の技をクリックした。

「すると」

若干の間。そしてユウの右腕が動いた。右下から斬り上げ、そのまま流れるように半円を描いて左下からの斬り上げ。ちょうど軌跡を逆なぞりする二連撃特技？アルファ・クロス？。

手には何も握られていないが、それでも軌跡だけなら見て取ることが出来る。

「数秒後に発動される」

ナナカは昨日も技を見ていたが、改めて感心しているようだった。「覚えたばかりの技は、自分でも見たことが無いだろ？ だから一

番初めはこうしてメニューから選んで発動するしかない。でも何回かやって、その技を体験した後なら」

ユウはウィンドウを閉じて、ナナカから六歩離れる。

そして刹那に技が発動する。

左腰から抜刀し、さっきとは左右対称の、ナナカから見てアルフ

アの軌跡を描く。

「こんな風に念じるといっつか『発動するぞ』って思うだけで発動できるようになる」

ユウは説明しながら片手剣を鞘にしまって、元居た位置に戻ってくる。

「最初は危ないから剣なしで発動するといいよ。空手でもちゃんと動いてくれるから」

そう言うとナナカは自分のウィンドウの術技一覧をジーツト見つめる。

「そうだな……」

ユウはナナカのウィンドウを覗き込み、人差し指で一覧をなぞる。

「これなんかいいんじゃないか」

選んだ技は、大剣の重量がそのまま活かせる技 斬系二連撃特技？アクセル・シングル？。剣を後ろに引いて、そのまま体と剣を一回転半させる特技だ。威力は特技の中でもトップクラスで、突系秘技？セカンドピアシス？以上の威力を誇る。

ちなみにアクセル・シングルの上位技には、二回転半する秘技？アクセル・ダブル？、三回転半する奥儀？アクセル・トリプル？がある。もつとも、最後の一つは一度も見たことが無いが。

ユウは技の有効範囲から逃れるために数歩退いてから、ナナカに合図を出した。ナナカは一呼吸してから、技をクリックする。

すると自然とナナカの手が後ろに下がり 技が発動した。

それは僅か半秒の間。

技を終えたナナカの顔は驚きに満ちていた。

「……すごい。自分じゃないみたい」

「その反応は正しいよ。術技つてのは、普通なら出来ないことを再現するモノなんだから」

術技は、一般的に天から与えられるものと考えられている。それが？天技？とも称される理由だ。

「一応説明しておく、技の後、僅かに？硬直時間？がある。これ

はどの技でも一緒だ。個人差は歩けど、大体半秒から一秒程度。その間は体が上手く動かない。短いと思うかもしれないが、技の発動に半秒は足りない。つまり、技をかわされれば、たちまち反撃を食らうということだ」

それが技のデメリット。

「だが、この硬直時間はある方法を打ち消すことが出来る。それは即ち」

「ユウは数歩下がって、構える。」

まずは、三連撃？特技？ファースト・ピアシス。三度の突き僅か一秒の間に繰り出される、だが、まだ終わらない。すかさず、四連撃？秘技？セカンド・ヴァーティカル、さらに続けて九連撃？奥儀？サード・ピアシス。

計十六連撃。

「特技の上位技が秘技。秘技の上位技が奥儀。そしてその上が秘奥儀。技が発動した後、その上位技であれば、硬直時間無しで発動できるんだ。つまり、特の後、秘技か奥儀または秘奥儀を放てば、その間には硬直が起こらない。勿論、秘奥儀より上位の技は存在しないから、結局、一連の最後には硬直時間があるんだけどね」

ナナカはその説明になるほど頷いた。

「格闘ゲームで x の順番に押すと連撃ができたりするだろ？それと一緒だ」

そう説明するが、ナナカは首をかしげた。

「あ、ごめん。格ゲなんてやったこと無いか……。ええつと、術について説明したい。ところなんだけど、俺は使えないからな。」

まあ、多分、発動に詠唱が必要なだけで大した違いは無いと思うよ。そう説明したとき、広場に大きな鐘の音が鳴り響いた。

「七時か……一回帰って、宿でご飯にしようか？」

「ええつと、今後の方針だけど……ごめん。特に案が浮かばないや。なんせき奥喪失つて簡単に直せるもんじゃないし。そうだな。まあ、俺の故郷に行けば多分保護してくるとは思っけど……」

ユウは朝食のサンドイッチをパクつきなが口を動かす。

すると、今まで黙っていたナナカが意を決したように口を開いた。

「あのね……。実は、私さつき変な男の人の声が聞こえたの」

「……男の人の声？」

「そう。なんかね。とりあえずユウに付いて行けつて」

「付いて行く？」

「一緒に宝玉を集めれば、いずれ記憶を取り戻せるからつて」

「……」

と、ナナカは不安そうな顔を浮かべて、恐る恐る、小さな声で聞いてきた。

「……ダメ……かな？」

「イヤイヤイヤ。」

正直、上目遣いで、しかもそんな声で言われて、ダメと言える男が居たら会ってみたい。

「勿論良いよ。ナナカさえ良ければ」

「RPGで言うところのパーティーメンバーが増えたわけだ。」

「OKも何も無いけどね。行くアテないし」

「よし。じゃあ、次目指す？青龍の神殿？があるのは、ランドルの東にある国？グランデ？。最短距離で一週間弱。グランデ領に入れば馬車があるから、それを使うとしても、五日強はかかるんだけど……」

「大丈夫でしょ。うん」

旅路は思ったより快調だった。

ユウはもう三ヶ月も旅しているから当然としても、ナナカの足の強さには驚かされる。その華奢な足から、一日はおろか、三十分で音を上げるものと思っていたが、その実そんなことは無かった。

取得している技からしても、ステータスがかなり高いらしい。

「それがさ。一つ目の玄武の神殿。一つ目なのにやたら敵が強くて、近くに居たタートル・モンスターですら、倒すのに一時間。で、中に入ったら、本当に死にそうになったわけ。で、最初から何か難しいなあ……」と思ったら。よくよく地図を見てもたら、玄武の神殿には??? って数字が振ってあったわけ。そのときは分からなかったんだけど。これ、攻略するべき順番だったわけ。つまり、玄武は二番目で、白虎が一番目だったのにさ」

道行く間、ユウは旅の途中で起きた出来事を少しずつ話す。

ユウが元々お喋り好きというのもあるが、ナナカには話す記憶が無いので、必然的にユウが一方的に話しかける形になっているのだ。

「先に玄武の神殿に行っちゃったもんだから、敵が強かったわけ。で、結局そこで二ヶ月修行して、ようやく倒したんだけど、当然、最初に攻略するべき白虎の神殿の難易度は低くてさ……」

と、そんな長話をしながら、林の中道を歩いていくとき。

突然、ナナカが足を止めた。

「ナナカ、どうし……」

た。と聞こえた。と聞いた。

ようやく異常に気がつく。

「困……まれた」

木の上からバサバサと幾つ物影が落ちてくる。

角の生えたヘルメットに、皮の鎧、そして曲刀。

「？盗賊？か」

初級人型モンスター？盗賊？。奴らは？人間の？盗賊ではない。

奴らは？魔物？としての盗賊なのだ。

それが証拠に、奴らの頭上にはHPの残量<ライフバー>が表示されている。

玄武の宝玉の能力。それはモンスターのライフの残量を視認すること。具体的には、モンスターの頭上にライフバーが浮かび上がるのだ。

よって、やつらが人間であることは無い。

だが、そんなことはどうでも良い。

問題は？困まれている？ということだ。

見れば、ユウ達の半径十メートルにざっと確認しただけで二十人。盗賊は動物型モンスターに比べれば多少厄介な部類に入る。が、既に二つの宝玉を手に行っているユウにとっては雑魚モンスターの一類でしかない。

ただ、問題は人数だ。

二十人。

ナナカが居る以上、逃げねばならない。

となると 絶対出来るとは言い切れない。

「ナナカ。俺が正面の敵を退けるから俺に付いてきてくれ」

そう言うと、ナナカは強張った表情で頷き 突然ウィンドウを開いた。

アイテムメニューをクリックし、中から何かを取り出す。

なにをしているのか そう尋ねる前にそれは既に実体化していた。

ナナカの両手に握られる剣。

それは華奢なその体に似合わない大剣？クレイモア？。

「一応出しておいて損は無いと思って」

ナナカは硬い表情のまま答えた。

確かに、武器を出しておいても損は無いだろう。

この？クレイモア？は見たところ、かなりの重量と切れ味を誇っている。振り回すだけでも十分な威力を発揮できるだろう。

「よし　じゃか行くぞ！」

そう言っユウは駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7272i/>

あの日夢見た幻想曲 ～フォース・ウォール～

2010年10月11日22時47分発行